ヨナ預言書

他の預言者たちがユデア人のため遣されたのに対して、ヨナは救いが普遍的なものである所から、異邦人にイスラエル及びユデア人の神なる天主の御憐みを知らせるために遣された。

彼はザブロン族領内、ナザレトの北にあるゲト・オフエルに生まれ、父は名をアマテイと言つた。ヨナが活動した時代は、北方王国のイエロボアム二世王の治世で、即ちキリスト御降生前八世紀の中頃（七六〇—七五〇年）であつた。

第一章

ヨナ天主より遁れんとす

一 茲に主の御言アマテイの子ヨナに下れり、曰く、二 起ちて大なる都市ニニヴェ[1]に行き、彼処にて説教せよ、そはその悪わが前に立ちのぼりたればなり、と。三 されどヨナは主の御面を避けてタルシス[2]に逃れんと、起ちてヨッペ[3]に下りけるに、偶々タルシスに行く船を見かけしかば、その賃銀を与えて之に乗りこみ、主の御面を避けて人々と

第一章 1) ニニヴェはアッシリア国の首都で、チグリス河畔、今日のモツスルの対岸にあつた。— 2) タルシスはスペインのグアダルクイヴイル河口に臨むフエニキア人の商業地。— 3) 地中海に臨み、当時フイリスト人の町であつた今日のヤッフア。

四　共にタルシスに行かんとせり。　四然るに主海に大風を遣り給いければ、海には激しき疾風起りて、船は殆く砕けんとしたり。　五船員等乃ち怯れ、人々それぞれ己が神に呼ばわり、また船足を軽くせんとて、船にありし荷物を海に投け棄てたり。さる程にヨナは船の奥に下り、深き眠に入りぬ。　六時に船長彼の許に近づきて之に云いけるは、汝何とて寝入りおるや。起きて汝の天主を呼べ、さらば或は天主我等を憶い出給いて、我等滅ぶることなからんか、と。　七人々各々その伴侶に云いけるは、いざ、我等籤を抽きて、何が故にこの災厄我等に至れるかを知らん、と。しかして彼等籤を抽きしに、その籤ヨナに当れり。　八是において彼等彼に云いけるは、この災厄何故我等に至れるかを我等に告げよ。汝の生業は何、汝の国は何処にして、何処に行くや、また何処の民なりや、と。　九彼乃ち彼等に云いけるは、我はヘブレオ人にして、海と陸とを造り給いし主、天の神を畏る、と。　一〇時に人々大いに怯れて、彼に云いけるは、汝何ぞかかる事をなしたる、と。（蓋し人々は彼が主の御面を避けて逃れ来しことを知り居りしなり、そは彼その由を彼等に告げ置きたればなり。）　一二彼等また彼に云いけるは、我等汝に何をなさば、海

一二 我等の為に静まらんか、と。是、海ますます荒立ち狂いたればなり。一三 乃ち彼等に云いけるは、我を取りて海に投げ入れよ、さらば海汝等の為に静まらん。蓋は我この大颶風が汝等を襲えるはわが為なることを知れば

一三 り、と。一三 人々は陸に帰り着かんと、4) 漕ぎに漕ぎしが、能わざりき、そ

一四 は海彼等の周囲にてますます荒立ち狂いたればなり。一四 是において彼等主

に呼ばわりて云いけるは、主よ、願わくはこの人の命を取らんとて、我等

一五 をも亡ぼし給うなかれ、また罪なき血を我等の上に帰し給うなかれ、そは

一五 主よ、汝はなさんと欲し給いし如く、なし給いたればなり、と。一五 かくて

一六 彼等ヨナを取りて海に投げ入れしに、海の荒れ狂うことやみぬ。一六 されば

一六 人々大いに主を畏れ、主に生贄を献げ、且誓願を立てたり。

第二章

ヨナに対する罰と救い

一 一 然るに主はヨナを呑ましむるに大なる魚1) を遣しおき給えり。よりてヨ

4) 彼らはヨナを上陸させて厄介払いをしようと思つた

第二章 1) 七

二　ナは三日三夜その魚の腹の中に居りき。2)
三　時にヨナ魚の腹の中より己が天主たる主に祈りて、
三　云いけるは、我患難のうちより主に叫びしに、彼我に応え給いき。我冥府の腹の中より呼ばわりしに、
四　汝わが声を聴き給えり。3)
四　汝我を海の中心なる深所に投げ入れ給いたれば、大水我を繞り、汝の渦巻と汝の大涛とはすべてわが上を越えゆきたり。4)
五　我云いけらく、我は汝の御目のみそなわす所より逐われたれども、なお再び汝の聖殿を見ん。
六　水我を繞りて将に命を奪わんとし、淵我を囲み、海わが頭を覆えり。
七　我は山々の根もとにまで下りぬ、地の門5)永遠に我を閉鎖したり。
八　されど主わが天主よ、汝わが生命を破滅より救いあげ給わん。
八　わが生命わが衷にて細りし時、我主を思い出でて、わが祈祷を汝の聖殿に至らしめ、汝の御許に達せしめんとせり。
九　徒に空しきものに6)心をかくる人々は、彼等に対する御憐みを棄つ。
一〇　されど十人訳ではこの魚を「鯨」としている。近代の人々は「鮫」だろうと考えている。

2)人がかかる魚に呑まれるのは自然的にあり得ることだが、かように長く生きながらえていることは、奇跡としなければ説明がつかない。―3)詩一一九・一。哥前一五・四。―4)詩四一・八参照。―5)地のかんぬきは、冥府(よみ)の入口にあると考えていた。―6)偶像神。

一一　ど我は讃美の声もて汝に犠祭をささげ、何にてもわが誓いし所を、救拯の為主に還さん、と。是において主その魚に云いつけ給いしかば、そはヨナを陸[7]の上に吐き出しぬ。

第三章

ヨナ、ニニヴェにて悔悛を説く

一　一主の御言再びヨナに下れり、曰く、二起ちて大なる都市ニニヴェに行き、わが汝に告ぐる布令を彼処に宣べ伝えよ。三仍りてヨナは主の御言のまま起ちてニニヴェに行きしが、このニニヴェは遍歴るに三日かかるほどの大なる都市なりき。四ヨナその都市に入り始めて、行くこと一日、呼ばわり云いけるは、今より四十日にして、ニニヴェ覆滅ぼさるべし、と。五ニニヴ

7) パレスチナらしい。イエズスも御自ら、ヨナが魚の腹中に留まりそれから出たことを、御自分が墓の中に留まられ、次いで復活されることの前表と説いておいでになる。

第三章　1) 多分ニニヴェ、レコボト、カレ、レセンの四都市を一つに見ているのであろう。

六　エの人々乃ち天主を信し、断食をふれ、大なる者より小なる者に至るまで粗麻布を着たり。

七　六この事ニニヴェの王の許にも伝わりしかば、彼その玉座より起ち、己が衣を脱ぎ棄て、身に粗麻布を纏いて灰の中に坐せり。[2] 七且王及びその諸侯の口より出でしこととして、ニニヴェ中に呼ばわり云わしめけるは、人も畜も、牛も羊も、何をも食すべからず、喰ますべからず、また水を飲むべからず。

八　八人も畜も粗麻布を纏い、力の限り主に呼ばわり、各人その悪しき道を離れ、その手にある不義を棄つべし。[3]

九　九さらば或は天主御心を翻して容赦し、その烈しき御忿怒を去り給うありて、我等亡びざるを得ん、誰かかることなしと知らんや、と。[4]

一〇　一〇天主彼等の行為を、その悪しき道を離れたるを、照覧し給えり。天主乃ちその彼等になさんと曰いし災禍に対して憐憫を発し、そをなし給わざりき。

2) 百一六・一六参照。
3) 耶一八・一一。
4) 耳二・一四。

第四章

ヨナの興奮と天主の御戒め

一　是に由りてヨナ大いに思い悩み、[1]怒りて、二主に向かい、祈りて云いけるは、願わくは、主よ、是は我のなおわが本国にありし時、云いし事にあらずや。この故にこそ我は前に、往きてタルシスに逃れんとしたるなれ。三蓋は我汝が仁慈あり憐憫あり、よく勘忍し、情深く、悪を容赦し給う者なることを知ればなり。[2]四されば今、主よ、願わくは我よりこの生命を取り給え、そは我にとりて生くるよりも死することこそ優ればなり、と。五主乃ち曰いけるは、汝己が怒れることを宜しと思うや、と。六是において、ヨナ都市より出で、都市の東の方に坐しぬ。即ち己が為そこに一つの小屋を造り、その下蔭に坐して、都市に何事の起るやを見んと俟ちしなり。七時に主なる天主常春藤[3]を備え給いしが、そは生えのぼりてヨナの頭を越え、その頭の上に蔭を造りてその身を蔽わんとしたり。是、彼が苦しみ居たるに

第四章　1)自族に敵意をもつ町の滅びを望んでいたので。―2)詩八五・五。耳二・一三。3)ヘブレオ語本「とうごま（蓖麻）」。これは成長が早く、葉が大きい。

七　由りてなり。ヨナはこの常春藤を大いに悦びたりき。

八　然るに天主は翌日曙の訪るる頃、虫を遣し給いしかば、そは常春藤を嚙みて、之を枯らしぬ。

九　次いで日の昇りたる時、主灼くが如き熱き風に命じ給い、且日ヨナの頭に中りければ、彼焼けんばかりになり、その霊魂に死せんことを願いて云いけるは、我にとりて生くるよりも死するこそ優れ、と。

一〇　主ヨナに曰いけるは、汝常春藤の為に己が怒れることを宜しと思うや。彼云いけるは、我死するほど怒るとも宜し。

一一　主曰いけるは、汝は己が労力を注ぎたるものにもあらず、己が育てたるものにもあらず、ただ一夜にして生じ、一夜にして滅びしこの常春藤の為に悲しめり。いさらば己が右左の区別をすら知らざる人々4)十二万余と、多くの畜とのある、この大なる都市ニニヴェを、我惜しまざるべけんや、と。

4) まだ分別のない即ち成年に達せぬ子どもたち。これによればニニヴェの当時の全人口は六十万ほどであつたらしい